シイタケ廃菌床をカブトムシの餌に

＝農業系スタートアップのピルツ＝

菌床シイタケ産地の秋田県横手市で2019年に設立された農業系スタートアップのＰｉｌｚ株式会社（ピルツ、畠山琢磨社長＝33）は、シイタケを栽培・収穫した後に残る「廃菌床」を再加工してカブトムシやクワガタなどの幼虫用の餌（マット）として与え、育てた成虫を販売する事業に取り組んでいる。飼育過程で出たふんは、畑の堆肥として有望視されており、循環型農業のモデルケースとして注目を集めている。（秋田支局・越橋宣之）

◇シイタケの自社栽培に強み

シイタケ栽培のノウハウを活用した飼育室を筆者が今年4月に訪れると、マットが詰まったプラスチックや瓶の飼育ケースが棚に整然と並んでいた。それぞれの飼育ケースには成長記録を記したシールが貼られ、管理は徹底している。室内には4000～5000匹の外国産のカブトムシやクワガタがいるというが、土の香りが漂い、清潔な空間だ。

廃菌床マットで育ったヘラクレスオオカブトの成虫

昆虫事業部の最上谷哲統括部長（42）によると、3カ月単位で、幼虫の新たな餌として飼育ケースにある廃菌床のマットを取り替える。交換作業では、幼虫がいる腐葉土のマットの低層部は残し、ふんを含む上層部を廃菌床のマットと交換。成虫になったら、販売するか、種親としてオス・メスの血統を考慮して交配する。飼育室では、最上谷部長と畠山社長、飼育歴9年の照井達也スーパーアドバイザー（25）の3人で作業に当たっているという。

飼育しているのは主に、世界最大で「カブトムシの王様」と呼ばれる、長い角が特徴のヘラクレスオオカブトだ。他にもゾウカブトなど約50種類を育てている。成虫になるまでに、ヘラクレスオオカブトで1年半から2年、最も遅いゾウカブト系の種では4年かかるという。成虫になってもシンボルである角が曲がらないようカバーを掛けるなど、卵から幼虫、さなぎから成虫になるまで、デリケートな作業が求められる。

昆虫は幼虫の期間が長ければ長いほど、大きく丈夫な成虫になるという。幼虫の期間は個体差もあるが、室温に左右されるといい、「数百匹何円で売るブリーダーは室温を高くして、早く成虫に育てる。そうすると小さいの（成虫）が生まれてくる」と最上谷部長は話す。ピルツは、質の高い成虫に育てることを目指して室内を比較的低い温度に保ち、生育速度を調整している。成虫はＥＣ（電子商取引）サイトやツイッターなどで販売しており、中間業者を介するペットショップに比べて販売価格は割安だという。

ゾウカブトの幼虫を手にする最上谷哲昆虫事業部統括部長

最上谷部長は、「普通のブリーダーでも、それだけ（ゾウカブトなどの生育にかかる4年）の年数育てるのは大変。うちは廃菌床がある限り育成できる」と話す。カブトムシなどの昆虫ブリーダーは国内に多くいるが、ピルツの強みはシイタケ

本記事・画像・写真を無断で転載することを固く禁じます。(C)時事通信社